

明治二十六年の秋に熊本なる第五高等中學校數百の人々と軍装して大分縣などへまからんとするをりあらかじめ作れる道ゆき : 文苑

著者	園, 哲雄
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 1
ページ	2 8 - 3 5
発行年	1893-12-20
その他の言語のタイトル	明治二十六年の秋に熊本なる第五高等中学校数百の人々と軍装して大分県などへまからんとするをりあらかじめ作れる道ゆき : 文苑 大分行軍の道ゆき : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4152

服群臣之心。不能徒服之。必有足以服之者焉。失群臣之心。非徒失之。必有足以失之者焉。余讀史。每至壬申之亂。未嘗不疑焉。夫大海人。雖叔分爲人臣。弘文雖姪名爲人君。以臣奪君。乃天下之大變也。而人臣之向背頓異者何也。弘文果有足失群臣之心者歟。吾未見之。適觀其器局英發。有人君之度。不愧爲天智之嗣爾。而及大海人一舉兵于吉野。群臣之中。向彼而背此者。沛然有不可遏之勢矣。是吾之所以不能不容疑焉。上下反覆。潛慮沈思。而後始知出於天智之處置失宜。而不足深怪也。天智之四年。使弘文爲太政大臣。是天智之失策也。夫太政大臣。雖尊爲人臣之位。雖重爲人臣之職。使他日嗣大位之皇子。居人臣之位。司人臣之職。以示中外。中外或謂他日傳大位不在皇子。而在皇弟。故豫置皇子於人臣之地。而爲之極也。蓋皇極以后嗣舒明。孝德以弟嗣皇極。齊明以姉嗣孝德。由是觀之。不必傳位於子者。舒明以來如爲例者。故中外之設心。亦未足怪也。是以天智晏駕。陵土未乾。輒尋干戈。豈可不惜哉。嚮使帝夙立弘文爲皇太子。以繫中外之望。以帝之德。加以太子之賢。中外豈肯不往此。而往彼。不謳歌此。而謳歌彼乎。故曰壬申之亂。出於天智之處置失宜。而不足深怪也。

明治二十六年の秋に熊本ある第五高等中學校數百の人々と軍裝して大分縣をどへまからんとするをりあらかじめ作れる道ゆき

一 段

物のほはれは秋のみぞ。多うるとあり風うよぎ。野もせに咲ける八千艸の。いづれ劣らぬ花すゝき。ほに出て人を招くをり。文机にのこ残りかゝり。いかでか居らむかゝる世も。もし瀟騒ぎ塵たゝば。千里の駒に較れきて。目にもの見せん軍たち。馴らさいらめやうちあひく。黒髪村に白妙の。雲に聳ゆるうつばりの。まあびの窓のろの中に。集ふ百千のますら男が。謀り合せてろろぞふ。大分さえてうち向ふ。」

二 段

進みたつ田の山里を。東へ行けばさゝ波の。大津に出で、瀬田の橋。ゆきかふ人よあふみ路や。うねの野あらぬ立野より。仰げば高し赤膚の。山の烟は夕立の。雲かどこえて雷の。鳴りはたゞきて一時に。あまた落ちくる聲するは。すがるの瀧のうちたぎり。岩に碎けて眞白ある。霞は横に迷り。あわてふためく青淵は。千尋の底の沸き騰り。立つ水烟捲さかへり。すはや龍ころ目の前に。飛び躍りなんばかりあり。」

三 段

見れどもあかず又みせど。あか瀬の橋をうち渡り。阿蘇の宮路に詣つれば。わもふも遠き神八井の。ここどの御末久しくも。ついさゝませる惟孝の。君が家門たからかに。寶くさくくゆる中の。輝きわたる螢丸。ある代の亂ありし時。惟直の君佩き給ひ。菊池の君と諸共に。たゝらの濱に戦ひて。醜草あまた斬り拂ひ。及は鋸あせる夜に。あやしき光飛ひきつゝ。もとの刀とされるより。この名負ひぬることゝかや。遠く隔たる九重の。みかどの

御爲つくされし。ろの真心のしのばれて。げに奇靈あるこの光。かくるゝ世こそあはるらめ」

四 段

からのやまどの文の名を。高本大人は常磐ある。萬つの松の廬のあと。ゆかしく見えつ鹿漬川。もみぢやいかに小嵐の。山の夕映みわたせば。杉のひら立つ手野の宮。ほど近くあり猫岳は。さもむくつけし猫またの。怒れる牙かどぐ爪か。もがくが如き勢は。噛み攪みせん風情あり。こは高峰のいくつにも。砕けくゝてありければ。峰くだけてふ詞をば。誰かねこだけと詠りけん。」

五 段

介鳥の湖あせはてゝ。舟にも乗らぬ波野原。過ぐれば豊の後。直入禰疑野の土蜘蛛の。打援八田と國摩侶と。日代の宮の天皇の。大御軍に射向ひて。滅びし跡の塚ぞある。北は大船。九重山。南は祖母が嶽あれば。やをら菅生をみかへりつ。」

六 段

吉田稻葉の川をもて。南と北の渥とあし。山もて四方を圍めれば。蓮の根をせる穴道を。入れば竹田の岡の城。跡もあつかし中川の。君の御祖は和田伊賀を。うちて勇壯なき名をしられ。今久知の君はしも。學のみちのはかせにて。多のをしへ子睦び合ひ。仰きかしつくどころあり。武かる事と文の事。車の兩輪のごとしとは。うべもいひけり柏峽の。大野はふるき天皇の。やどりたまひし名残とよ。」

七 段

小春の空のうらくと。温見^{ヌヰミ}をすぎて荒木谷^{アラコ}。あら珍しき山川の。清かる中を往く人の。
ゑがまほしくてもほえて。いつしか立てるわのが身も。から繪とありて風流士^{ミヤビチ}が。吟行^{サマヨ}ひ
出つる野津原の。ろの原つゝ大分は。地大^{トコロ}に廣くして。又きらくしかりければ。碩田^{オホキタ}
ところ稱^{タテマ}へまか。」

八 段

國府^{コフ}は府内と改めて。大友氏や大給氏。世々襲がれたる城のあと。今は縣^{アガタ}の廳^{ツカサ}あり。奈良
の御代にぞ世をすてし。こゝろ金剛法戒寺。上野の岡にはのみゆる。蓬萊山^{フナギ}には千年ふる。
松に春日の社あり。あはれ鶴見の山鶴の。思ふとちとや見るあらむ。鶴崎佐賀の關までも。
ふりさけ見れば蓬落^{フナナ}の。港に遠くふさくるは。伊豫^{フナナ}の二名の風をらむ。」

九 段

名だゝる山の高崎は。いと峻^{タスキモノ}しかり風流人の。詞やさしくしはつ山。あらの若葉にうさゝれ
て。ねらふさつ男のたゆみさの。よやと歌ひしこともあり。眞玉拾はん濱脇を。あさりて
わたるあさみ川。眺望^{ミハラシヨ}宜かる觀海寺。龜井は萬つ代祝ふめり。湯桶固まる鐵輪^{カンナリ}も。いづれ
の山の硫黃^{ユンアス}の。焼ける別府の楠の湯か。旅に勞^{イタツ}く人々の。浴^アみて奇^{クニ}しき藥とぞ。」

十 段

出つる野口は山の裾。石垣原の雨夜には。矢叫^{ヤケヒ}の聲きこゆめり。こは大友の吉弘が。黒田
の君に破られて。恨を吞みて死にしかば。靈のしわざによるとや。速見^{ヒメ}に住みし速津媛。
帝^{ミカド}を迎へ奉り。賊^{アサ}のふるまひ告げしかば。來田^{クミタ}見の宮に留りて。大に議りたまひきと。」

十一段

日出は帆足の大人により。いみじかる名を世にしられ。日田の詩^{カラツタ}日出の文^{フミ}。あらべたへ
てありきとや。許多^{マ、ラ}學びし人の中。賀來のはかせの君はもと。こゝよりはやく身を立てゝ。
よろづの人の仰ぐあり。よに珍しき鳳凰の。尾を並べるか大空に。翔らむばかりある蘇鐵^{スエツ}。
松屋でちに聳えたり。妙國寺へぞ歸らひと。又歸らひと眞夜中に。呻^{ウツ}りしよりも大あり。
海の中ある眞清水の。湧ける處に群れ集ふ。城下^{シロノゲ}鯉はこの國の。みくなき響應^{オウオウ}ものといふ。』

十二段

雲の冠いたゞきて。夏も氷れる白雪の。絶えざる峰のだち分れ。二つとあれる由布の岳。
これぞあだ名の豊後富士。見ながら越ゆるか。越は。金山ありしろのあとの。立石にこゝ出
つるあれ。過くれば豊^{トヨ}の前^{ミナトノチ}。宇佐は畝火の白檣^{カシハラ}原の。宮のミかどのいる兄^セある。五瀬の
みまどゝ高千穂に。はかりたまひて東^{ヒムガシ}の。方にこゝいでまゐめとて。こゝに來^キませるろの
時に。宇沙都比古らは足一つ。騰^{アガリ}の宮を作りてぞ。大御饗^{オホミツヘタマツリ}献りしと。』

十三段

石もてかける猫橋に。武き名を得し君が舟。繫きしあとの塚ありと。穢^{ケガレ}磨とは誣ふとても。
大内山に立ち蔽ふ。忌々^{ナニ}しき弓削の黒雲を。わけの清磨君はもと。あぢきなき世を宇佐の宮。
神に誓ひてうち日さす。都へ上り頑狂^{クナダレ}。天にも登る勢を。たゞ一言^{ヒトコト}よあどわりて。氣疎^{ケス}き
膽^{タモ}を寒^{ヒヤ}さしめ。天つ日嗣の動きあき。御代とあしにし功^{イサナ}は。山をも抜かむ力にも。はた
世を蓋^{イサシ}ふ氣も。くらぶべきかは上にして。天つ御祖^{ミヤ}のミことのり。得報^{トクホウ}いふつり下にして。

今しもかくはほきらかに。治める御代に生れあひ。あやにかしこき現つ神。わが大君に正しくも。仕へまつるは猶これの。賜物あるぞ各自。かゝる宮居に詣てゝは。いかにあわれぞまゑつらむ。」

十四段

あはれし増さば今の世は。勉め學びて日の本の。光を四方の國々に。輝かしつゝこの神の。服順はざりし外國を。向言ましうのうその。わがを絶ちろあの人。名にあたりこの人は。護王神といつられて。行末遠くねはすべし。死ぬとも生ける如しとは。このおどこかま羨し。筋をぬがれて大隅へ。流され道に殺さむと。たばかりつれど電光。鳴る神のミかこの神の。守りたまひま幸もあり。御許の山の阪路に。たが馳せぬらん馬の蹄。ながすり書さし硯石。水の奇しく妙あるは。燈の灘の潮水の。満干によりて満干すど。」

十五段

驛貫川をうち渡り。柳が浦の拾小舟。ひく人もなく見えぬるは。昔平の公達の。笛をえちらず吹きすさび。こゝも都の月あれど。屋嶋の浦に嘯きて。浦又浦と傳ひつゝ。流離來にし涙をば。乗せし名残よあらざる。艶にやさしき都ある。花を戀ふとも武き道。もま怠らば又らる。零落ともあることあらむ。銃とり直せ殿原よ。心もわがも勵ますば。世界に立つ術はあらざるぞ。和泉の宮はふるき代に。うま酒湧きて後は酢に。湧き變りしが今は又。清水わきけりさらでだに。わたる旅人袖ひちて。結ばまほしく見ゆるあり。」

十六段

伊勢にはあらぬ四日市。犬丸川や鎗矢堂。うら醒くふく風は。鬼の怨める聲すらむ。うらさびしくも過ぎゆけば。出つる中津の中々に。奥ぞゆかしき奥平。君こそここに居たまひし。跡著くあれその昔。わが細川の君もまた。ここに居たまひ賤たまさ。数あらねども臣らが。祖らもここに朝あぐ。仕へまつりしことあれば。斧に摧けし松のあと。田に鋤かんずる古墳も。そこはかとなく吊ひて。袖のしぐれにぬるゝかき。

十七段

山國川の又の名は。高瀬の川の又々の。名は世に甚く廣瀬川。川溯り菅の根の。長くも道はありとても。類あらまののみぢ葉も。削るに似たる巖をも。賞づる心し耶馬の溪。山のけしきのもでたさに。耶馬の溪とや名つけゝん。うぎたつ岩の曾木の村。徘徊りて思ふには。安藝あたりなる某の。大人の妙ある漢文に。よりて辛くも普くは。しられ初めしがの昔。久き世々に埋れて。可惜秘めたる樋田の村。

十八段

やがて跡田や羅漢でら。こはろのもとを尋ねれば。わけて怪しき巖ある。古羅漢より諸の。佛は何を憤りて。一夜の中にこゝにしも。うつろひ來けん不審しな。こゝにはうるさき地獄あり。又極樂も構へあり。恐しや又たのもしや。われこそ誠實に拜まめ。助けたまへや南無阿彌陀。

十九段

水を夾める千々の峰。筭のぞとつき出で。麓は暗き穴もあり。木々は危く横に生ひ。倒

にも生ひて上にさき。石と所を争へる。壁なす岩のいや高く。落ちくる瀧の白玉は。柿坂
むらにちりしけり。はむとも盡きじうの状は。いふともはてし繪にかゝば。金岡もが歌ひ
あば。人丸もがあわくらばに。まゝくひ見けん人あくば。まだしも永く屈智林。くちはて
あまし覺束あ。」

二十段

ろもくかゝるけききあり。世にしれざりし昔をば。何と歎かん又何と。憾みかこたんはか
あくも。あましかりき唐土の。孔子の才すら世に逢はず。宇土の牧ある池月は。宇治の
荒瀬の逆捲くに。敵は矢ふすまつくるとも。さもあらばあれ何のその。岩をも徹す梓弓。
引きてかへらぬ景季を。颯と躍り超え魁の。又魁とありつるも。さて眞つ先のさゝ木ぬし。
世に二つなく高綱の。たかきその名を揚けてころ。宇土より出てしかひもあれ。嗚呼美しの
つくしある。清き山河ある中に。住みて學べるうちに猶。髣髴たるものありと知れ。希有
の高綱安藝のその。大人こそいかに稀あらし。」

題藤公在朝鮮望富嶽

隈本繁吉

突破鷄林八道衝神州威武將軍鍾戰餘無或懷鄉國立馬汀沙望富峰。

牧谷橋上

全

關山流水自仙寰秋色却疑春色還誰識匆匆餘恨去續紛紅葉撲吾顏。

牧谷

水月哲英